

ケルトの国アイルランドは、イギリスの西に位置する北海道ぐらいの大きさの島です。アランセーターが生まれたのは、そのアイルランド西岸ゴルウェイ湾の沖合に浮かぶ三つの小さな島々で、総称してアラン諸島と呼ばれます。西からイニシモア、イニシマン、イニシピア。イニシはゲール語(ケルト語)で島を意味し、イニシモアは「大きい島」、イニシマンは「真ん中の島」、イニシピアは「東の島」というたってシンブルな名付けがされています。面積は3つ合わせても伊豆諸島の三宅島ぐらい、人口は3島で約千三百人。アイルランドの中で

も土着のケルトの風習が色濃く残る異郷の地。大西洋の風が打ちつけ、草木もろくに生えない岩だらけの小さな島。大した作物も取れず、小舟で漁に出るのも命懸けの過酷な生活。ここになぜ人が住み続けているのだろうか、とさえ思えるような厳しい環境の島です。という、まるで一切の来訪者を拒むような絶海の孤島の様な印象を受けるでしょうが、現在のアラン諸島は、アイルランドを代表する一大観光地なのです。地図を拡げていただくとお分かりのように、本土からそれほど離れているわけでもなく、天気さえ良ければ首都



見渡す限り石垣が続くアラン諸島も、春から夏にかけては多くの観光客が訪れる

世界手芸紀行⑩「アイルランド」

# アラン

取材・文／野沢弥市朗

伝説をまとい、伝説に活かされた白いセーター

ボストン帰りの天才ニッター、マーガレット・ディレインは、ガンジーセーターを進化させてアランセーターを生み出した



ダブリンからの日帰り弾丸ツアーも組めます。適度な不便さは「手頃な秘境」として人気が高く、夏のイニシモアは景勝ダン・アングスの断崖絶壁を訪れる観光客でこった返しています。イニシマンやイニシピアにもサマースクールの学生たちが集まってきて、夏場の観光はアラン諸島での最大の産業となっています。まあそれも夏の間だけで、冬になれば昔ながらの静かで何もない島に戻ってしまうのですけれど。

## アランセーターの始まり

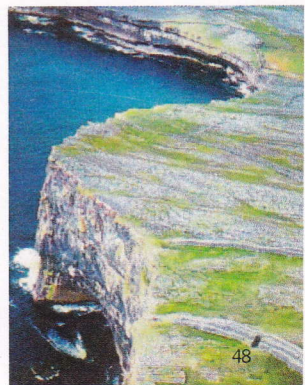
アランセーターという、いつも語られるストーリーがあります。

『6世紀の昔からアラン諸島で編み続けられているアランセーター。白いウールで編まれたその独特の編み柄には、漁に出る夫の無事と豊漁を願う女たちの祈りの意味が込められている。その組み合わせは、家々の編み手によってあたかも家紋のごとく異なり、それは母から娘へと伝承されている。万一、不幸にも漁での溺死者が岸に打ち上げられたときには、着ているセーターの柄でその身元を判断したといわれる。』

荒海に漕ぎ出す男たち、それを優しく包む女たちの愛。このストーリーは、アランセーターが世界に普及するにつれ皆に知られるようになり、いつしか伝説とまで言われるようになっていきました。

私は、アランセーターを40年にわたって世界で紹介し続けたアイルランドの元弁護士である老人バドレイグ・オショコン氏と1987年に出会って以来、アランセーターの魅力でずっと、これを日本で販売する仕事を続ける傍らで、この伝説を解き明かす本まで書いてしまったのです。(アイルランド「アランセーターの伝説」織研新聞社2002年)

イニシモア島の景勝ダン・アングス。「説には海中に沈んだアトランティス大陸の境目だとも言われている



時は20世紀を迎えたばかりの頃の話です。アラン諸島イニシモアには殖産興業のための漁業基地が造られ、そこにはスコットランドからやって来た漁師たちの家族が多く出入りしていました。当時の海の男のセーターといえばガンジーセーターです。紺色の編み地で肩や胸に裏編みの縄目模様が入ったセーターで、その名の通り英仏海峡のガンジー島で19世紀に発祥したのですが、徐々に英国の漁師たちの間で広まり、英国やアイルランド沿岸部の各地に普及していました。他の港町と同様にアラン諸島にもそのガンジーセーターが伝えられたのです。もともと手先が大変器用だった島の女性たちでしたから、このセーターの編み方はすぐに島中に広まっていったのです。

そこへ一人の女性がこの島に帰ってきました。マーガレット・ディレイン。彼女が存在がアランセーターの最初の芽を出させます。イニシモア出身の彼女は一

イニシピアの家庭にあった記念写真。白いセーターは少年の晴れ着である







## Aran

A / 8世紀に書かれた聖書の装飾写本「ケルズの書」の描写。アラン模様を纏っているようにも見え、アランセーター千年説の根拠にもなった

B / 博物館の所蔵品の中で最も古いアランセーター。1930年代前半にインシモアで編まれたもの。ガンジーセーターから枝分かれた直後の頃なので首もとなどにはガンジーの名残が見受けられる。実際に漁師が着ていたセーターを収集しようだ

C / 1930年代後半に編まれた茜色の女性用カーディガン。男は紺、女は赤、子供は白が島の常識だった

D / 1937年に寄贈された最高レベルの作品。アランセーターが商業化する以前の装飾性の高い芸術品

E / 1946年のコンテストで優勝したマーガレット・ディレインの作品。アランセーターの創始者としてのプライドなのか、渾身の思いがこもった傑作である

F / Eの後身頃。袖への柄入れもかなり複雑な装飾が施されている

G / セーターDの肩の部分。複雑な柄の入れ方が見事

(B〜G National Museum of Ireland 提供)







ガンジーセーターを語るアラン諸島の漁師。  
肩のところに単純なケール模様が見て取れる

度アメリカのボストンに女中奉公に出され、3年ほどして再び戻ってきた女性でした。彼女は類いまれなる想像力と技術を持った手編みの天才だったのです。ボストンで数々のハンドニットに触れ、いつしかセーターの柄を見ただけで、まるで筆で描くように、編み針でそれを再現できたのです。彼女が先生役となり、島の女たちの間では競うように様々な柄が編み出されました。また、もともとこの島には独特の派手好みなところがあつたことも手伝って、出来上がるセーターは徐々に編み柄のはつきりとした豪華なものになっていったのです。こうしてアランセーターの原型が現れました。1920年前後のことです。

### インパクトカラーの獲得

当時漁師たちが着ていたのは白ではなく紺色のセーターでした。そりやそうです、白ではすぐに汚れてしまいとて漁など着ていくことはできません。でも現在ではアランセーターといえば白です。白は一体どこからやってきたのでしょうか。実は白いアランセーターは本来は少年の嗜れ着だったのです。

アラン諸島には「男の子は悪魔にさらわれる」という古い言い伝えがあり、男児も女兒と同じワンピースのような赤い服が着せられました。そして12歳になってようやく男の格好ができる、その時の儀式が教会の堅信礼（コンファ

メーションで、いわば日本の元服式に当たるといえるでしょう。ちょうど島の女たちが編み物に夢中になっていたこのころのこと、この堅信礼にあたり、母親はわが息子のために精一杯豪華な白いセーターを編んでやったのです。

貧しい島でなんと贅沢な、とお思ひでしょうか。そうではないのです、成長の早い男子ですから、その白いセーターはやがては解かれて紺色に染められ、再び大人のためのフィッシュヤーマンセーターに編み直されていったのです。手編みセーターはリサイクルウェアであつたわけですね。

かくして、アランセーターは白という色を得ました。歴史に「もしも」はないと言いますが、もしもアランセーターが白くなかつたらこんな世界に普及しなかつたでしょう。それほど白という色は強烈なインパクトがあつたのです。

### 芸術的価値を認めた女性

子供用の白いセーターを大人サイズに編むというコロンブスの卵的なアイデアを与えたのがミユレル・ゲインという女性です。彼女は国内の各地に伝わる女性のクラフトワークを支援し続けた女性活動家で、それらのクラフトワークの数々はダブリンで彼女が主宰するカントリショップに集められて販売されました。アランセーターは1935年から販売が始められていま



アランセーター普及の最大の  
功労者であるパドレイグ・オシオコン

## 世界手芸紀行⑩「アイルランド」 アラン

持つ芸術的価値を初めて認識した人物で、アランセーター普及の最初の立役者と言えます。

終戦直後の1946年、ゲインの声掛けで「アランセーター・コンテスト」が開催されます。アランの3つの島に呼び掛けられエントリーは50枚を超えました。賞金の掛かったコンテストですから、編み手たちは持てるスキルを惜しみなく注ぎ込み、それはそれは素晴らしいセーターが集まりました。第1位は当然ながらマーガレット・デイレイン。その時の優秀作が何枚か保管されていて、現在、アイルランド

国立博物館カントリリーライフ館で鑑賞することができま

### 奇跡を起こした功労者たち

次の立役者はパドレイグ・オシオコンです。彼がいなければアランセーターが世界に普及することはなかつたでしょう。1951年に設立されたばかりのアイルランド政府輸出庁の支援を受けた彼はアラン諸島へ乗り込み、アランセーターの産業化に取り組みます。

編み手を組織化し、デザインやサイズを（適度に）標準化させ、糸や道具を一括調達し、アランセーターを売れる商品として作り上げていきました。オシオコン氏の功績は、このアランセーターの産業化を他ならぬ発祥の地アラン諸島でやってのけたことにあります。かつて世界中のあちこちに様々な手編みの



アランセーターの芸術的価値を高く評価した女性活動家ミユレル・ゲイン。97歳の誕生日にて

セーターが生まれましたが、百年以上経っても発祥の地でハンドで編み続けられているセーターなどアランセーターをおいて他にはありません。これは奇跡と言つてもいいでしょう。

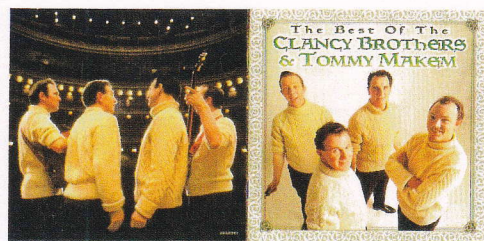
彼はまた精力的に世界にアランセーターを紹介しました。まず1956年にはクリスチャン・ディオールがそのコレクションにアランセーターを取り上げ、クラフトではなくファッションアイテムとしての評価を高めていきました。そして60年代、いよいよアメリカへ。1961年、JFKことケネディが第35代米大統領に就任します。アイルランド移民の子孫がアメリカの頂点に立つたことで全土にアイリッシュの風が流れ出します。ケネディと時を同じくして拔群の人気を博していくのが、アイルランド出身の四人兄弟が結成したフォーク・グループ、クランシーブラザースでした。彼らの揃いのトレードマークがアランセーターだったのです。当時の人気番組「エド・サリバン・ショー」へはわずか16分の出演でしたが、揃いのアランセーターの反響は大きく、その後一気にアメリカ全土へ広がっていったのです。

日本で大ヒットするのがアメリカから少し遅れて1969年から71年にかけてです。当時はフィッシュヤーマンセーターと呼んでいて、英国か北欧のセーターだと思われていました。発祥はと



1950年代初頭の堅信礼の集合写真。  
男の子はみんな白いアランセーターで臨んだ





H

## Aran

H／揃いのアランセーターを着るクランシーブラザーズ  
I／アイルランド西部メイヨーにあるアイルランド国立博物館カントリーライフ館で、2008年に催されたアランセーターの展覧会。所蔵の貴重なアランセーターが一堂に展示された(National Museum of Ireland 提供)  
J／モーリンはローマ法王への献上セーターも編んだ伝説のニッター  
K／紺と白は、ゴルウェイのショップ「オモリーヤ」を通じてアラン諸島周辺の優れた編み手に限定して、日本人サイズで編ませているアランセーター(ともに¥55,650)。カーディガン「アラン・レジェンド」もアイルランドのハンドニット(¥49,350)。すべてセヴィルロウ倶楽部

### 野沢弥市朗：のぞわやいちろう

1957年生まれ、神奈川県藤沢市出身。静岡市にて「英国気質の洋服屋・セヴィルロウ倶楽部」を経営。アランセーターを世界中に広めたパドレイグ・オショコン氏の日本のエージェントを務めるなど、アランセーターへの造詣が深い。著書に「アイルランド／アランセーターの伝説」(織研新聞社)がある。(株)ジャック野澤屋代表取締役。TEL 054-252-0231  
<http://www.savilerowclub.com>



K

もかくとにかくアメリカで流行っていれば当時の日本では売れたのです。アイルランドの伝統的セーターだということを知覚されたのはオショコン氏が70年代初めに来日して以降のことです。以来、彼の来日は1995年に90歳で亡くなるまでに50回を超え、多いときは年間千枚を超えるアランセーターがアラン諸島から我が国に運ばれたのです。それは伝説の波及とともに。

ここで、いつも言われる、例の「潮死者の身元確認」の話について触れておきます。実はこれには元ネタがあるのです。随筆「アラン島」でこの島を世界に知らしめたアイルランドの小説家J・M・シングの一幕ものの戯曲「海に降りゆく者たち」(1904年)がそれです。遭難者の遺留品として届いた手編みのソックスを手にした家族が、自分の編んだものと判断する印象的なクライマックスのシーンがあります。ちよつと気の利いた演出家なら、ソックスを白いセーターに置き換えることなど難のないことだったでしょう。ある島の編み手は私にいつも簡単に答えてくれました。「自分の編んだセーターはすぐに分かるわよ。絶対間違えつこないわ。日本に送ったものだろうが、溺れた人が着ているのが…」

これらの伝説は実に良くできたセールストークでした。いまだに信じている人が多いのがその何よりの証拠でしょう。

### アランセーターのこれから

アランセーターの現状は厳しいものがあります。オショコン氏の手掛けたアランセーターは、編み手によって1枚1枚サイズも柄も少しずつ異なっていました。これがアラン諸島で編まれている何よりの特徴であったのですが、このことがアメリカでも日本でもチェーン

ストア化した小売店舗で画一的な商品を大量に仕入れて販売するシステムに相容れませんでした。このアランセーターを売れる店が90年代になってどんどんとなくなってきたのです。と同時に編み手も次第に減ってきました。20世紀のうちは高齢化と人口減がその理由でした。21世紀に入り島の人口は徐々に増え始め島民の平均年齢も若返ってきましたが、その収入源は主に観光に依存しています。食べていくための編み物はもう必要がなくなったのです。

それでも完全に灯が消えたわけではありません。私のところでは、今も島の内外で10名ほどの編み手に頼んで、年に数十枚のセーターを仕入れて静岡の店で販売しています。

この1月、私はイニシマンを訪れました。長くオショコン氏の元で島のまとめ役を勤めた島一番のニッター、モーリン・ニ・ドゥンネルを見舞うために。かつてローマ法王への献上セーターをも編んだ伝説のニッターもすでに80歳近くになり、仕事として編むことはやめました。それでも毎日時間さえあれば編み針を動かして小さなものを編んでいます。その手先の動きは昔とまったく変わらなく目にも留まらぬスピード。ゆっくりと笑顔で話をしているのに、指先だけが別の生き物のように勝手に動いているという印象です。

「何も急いで編んでいるわけではないのです。長いこと編んでいます、このスピードが私の心を一番穏やかにしてくれます」

思いのほか元氣な様子に安堵する私に、モーリンは昔とまったく変わらぬ言葉を与えてくれました。

「このセーターは私が編んでいるわけではありません。神が私に編ませてくれた、神様からの贈り物なのです」